

54人の園児全員を津波から救った保育所長『マニュアルづくり、確認、そして行動』「奇跡」が起きた理由

we support ↓

RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろうー大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』しんぶん
かめぼし

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

APRIL
11
2016



＜佐竹さんと閉上保育所の避難行動＞
午後2時46分 地震発生
佐竹さんが外出先から園に駆けつけると、昼寝中だった園児54人と職員10人が園庭に避難していた。
午後2時55分 決断/3つの指示をした。

- 1・逃げます
- 2・車を持ってきてください
- 3・小学校で会いましょう

職員が車をとりに行く間、園児たちと歌を歌いながら待った。

午後3時20分 全員が閉上小に到着、3階建て校舎の屋上へ

午後3時52分 津波が到達。
その日、名取市は雪が降っていた。津波の流れをみて3階までは届かなそうだと判断、寒さに凍える園児を3階に戻した。

午後4時10分ごろ プロパンガスの爆発で周辺に火災が起きる中、職員たちは視聴覚室で園児を円にし、平常時と同じように一緒に歌を歌い、お絵描きをした。「思い返したときに、辛い思い出だけが残らないように心がけたのです」

午後6時 あたりは闇に包まれ、自衛隊、報道のヘリコプターの音だけが響いていた。その頃、子供の口から「もっとも聞いてほしくない質問」が増えてきた。「ママは？」

「必ず来るよ」と声をかけた。
午後8時 カーテンを外して床に敷き、子供たちを寝かせた。「もう遅いから寝ようか」

翌朝 やっと到着した避難用のバスに乗り込み、7キロ内陸の小学校の体育館へ移動した。途中、ショッピングモールの近くに津波で流された船があった。「所長先生、お船も遊びにきたの」

「そうだね、お船もスーパ-を見てみたかったのかもね」。
4日後 最後の一人を親に引き渡すことができた。

3月27日 避難所で退所式を開いた。
子供たちに「津波のせいでできなかった」と思ってほしくなかった。津波は来ても、これからの人生にできないことはない。小さいけれど、そんな思いを込めた式だった。

「閉上の奇跡」と呼ばれるようになったが、当時の所長、佐竹悦子さんは「奇跡は偶然では起きない」と話す。
佐竹さんは2010年4月から避難マニュアル作りをはじめた。避難訓練をしようと思つて職員に避難場所を訪ねても、行ったことはない、詳しくはわからないと答えが返ってきた。
「リアス海岸ではない閉上には津波が来ない」。閉上地区ではこんな話が伝わっていたが、佐竹さんは

「ここは漁港から260m。津波を含めて、海に閉係する災害は最悪を想定しました。場所柄、3m以上の津波がきたら、まず誰かが助からない」。
口頭伝承よりも、自らの職務である「朝お預かりした命を、夕方しつかりお返しする。最悪の可能性から子供の命を守る」を最優先した。
避難先をどうするか。近くにある鉄骨の3階建てのアパートや、内陸の公共施設も検討したが、発達障害の子供たちがいて、狭い空間やなじみがない場所だとパニックの恐れがある。不安を最小限に抑えるため、園児となじみのある閉上小学校を選んだ。
震災後、車で逃げるなんてもつてのほか、と批判も受けた。閉上地区では車で避難しようとした住民によって、渋滞が起きている。

佐竹さんの考えはこうだ。現実的に1歳児を抱えて、走つて逃げることはできない以上、移動は車しかありえない。ならばどう渋滞を避けるか。あらかじめ渋滞が発生しやすい道路かを予測しておく。信号が複雑で抜けるのに時間がかかる5差路は避け、職員同士で、地区内の道路を走り、議論を繰り返して避難ルートを決めた。
大事なのは、すべて自分たちで直接確認したということだ。「マニュアルは作つて安心ではなく、常に確認するもの。私たちはこの日、冷静じゃなかった。非常用の持ち出しグッズも持つて出ることができなかった」
それでも助かったのは、日頃、全員が非常時にやるべきことを確認していたことに尽きる、と思つている。
「奇跡つて偶然の上におきるものじゃないのです」



佐竹悦子さん(撮影:石戸 諭)

＜おしらせ＞西表でも『東京防災』が読めます！
東京都が都民に配布した防災マニュアルが、西表島エコツーリズムセンターの図書コーナーに届きました。応急処置から避難所運営、避難訓練の方法まで網羅した、パワーある一冊です！